

紹介

◎圖書

●三浦の安針

加藤三吾著

界に聞けて居る。今は北京に滯留中であるが、先頃ある日本の學者と面晤した時、彼は日本に於ける支那學界の不振を切言したと傳へられて居る。如何にもわが支那學界の不振は掩ふべからざる事實で、精進倦なきペリオ等に對して、實に慚愧怱怱に堪へざる譯である。併し飜つて一考すると、かく不振を極めて居る我が支那學界も、其内面は案外に進歩して居るものか、世界有數の支那學者たるペリオの熱心に研鑽して得た結論と、略同様な結論を獨立に然も一層早く得つゝある若干の學者の存することを思へば、幾分自から慰むるに足ると思ふ。我が國の支那學界に好意を有すべきペリオがこの事實を知り得たならば、必ず衷心より歡喜する筈と思ふ。

本書は西紀第十七世紀初期、端なく我國に漂着して將軍家康の寵眷を受け、相州逸見に於て采邑を食み、江戸日本橋の安針町に永く其名を留めし本邦初渡の英人ウヰリアム、アダムス即ち三浦安針の事蹟を叙述したるものなり。而して著者は安針が埋骨の地として因縁深き平戸に在ること多年、此間博く史料を涉獵し安針の事蹟に就きて實地に踏査し、精緻なる研究を遂げたる篤學の士なり。本書全篇を十章に分ち、第一章乃至第三章は近世の初期、東西兩洋交通の機運漸く開け、歐人の東洋に來航するに至りし次第を述べ、第四章「安針の前半生」には彼が幼時の經歷より和蘭東印度商會の船員として本國を出帆し、途中幾多の艱難に遭遇して我國に漂着せし事情を叙し、第五章「安針の活動時代」には安針が家康の顧問として専ら外交事務に貢獻せし功績を述べたり、第六章「オランダの通商」第七章「イギリスの通商」に於ては英蘭兩商館の爲めに幕府との交渉の任に當り、兩國貿易の利便を計りしこと、第八章「安針の晩年」には彼が北海回航を企て、果さず

に平戸の假寓に歿したることを等を述べ、第九章には相州逸見の安針塚及び平戸に於ける安針の埋骨地に就きて考證を試み、第十章餘論として安政の開國並に日英の同盟に論及せり。(東京明誠館書店發行、價一、三〇)

●貿易史上の平戸

文學士 村上直次郎著

本書は寛永鎖國以前平戸が外國貿易市場として隆盛を極めたる時代の史實を平易簡明に叙述したるものなり。先づ平戸が古來朝鮮支那との交通の要路に當りしことより説き起し、天文年間葡萄牙商船初めて此港に來りし事情、當時耶穌布教の狀況等を述べ、次で葡萄牙人は横瀬福田を経て長崎に移り、平戸港は一時沈靜に歸したりしが、慶長年間蘭英人來りて此地に商館を設くるに及び再び繁華に赴き、更に蘭英人は西班牙葡萄牙人に對抗せんが爲め防禦同盟を結び、平戸を兩國聯合艦隊の根據地となし、平戸港、外國貿易の全盛期を現出せしことより英人が蘭人との競争に敗れて間も無く日本を去り、次で西班牙葡萄牙の通商禁止となり、蘭人は日本貿易を獨占せしが、島原亂後長崎へ移さるゝに及びて、平戸の海外貿易全く斷絶するに至りしことを説けり。本書は概く内外の史料に據り、此間の史實を明かにし、殊に英蘭兩商館貿易の實況、當時の輸入品及び其價格、又當時屢行はれたる兩商館員參府の經費等に就きては、根本史料に基きて精密なる調査を試みた

る所、著者蘊蓄の一端を窺ふべし。附録として重要な史料二十八種を掲げ、且つ多數の寫眞を挿入し、讀者の興味を深からしめたり。(日本學術普及會發行、價一、五〇)(以上山鹿詠之助)

●聖德太子傳

増野黃洋著

本書は著者が本邦の歷史上に現はれたる數多の偉人中最も偉大を信じ且つ最も誤解されたりと信ずる聖德太子の眞面目を發揮せんとして著はしたるものなり。是より先、著者は明治卅七年「聖德太子傳」を公にし、次で四十一年其再版として「増訂聖德太子傳」を出せり。本書は更に補訂を加へたるものにして、先きの増訂版と比較するに、其の多くの部分に於ては同然なるも、亦所々主要なる點に改竄を施したるものあり、即ち第一章の緒論は此れを彼れの第一章太子傳を研究する必要と類似の思想より書かれたるものなれども、さきには國史の大勢を大化改新、鎌倉幕府創立、明治維新の三區劃となしたるに、此には大化改新と明治の維新とを以て國史の二大更新なりと斷じて、聖德太子の地位を以て明治天皇と比較したる如きは、其の一例にして、議論は遙かに前者の夫れよりも穩健周匝なるを覺はしむ。第八章太子前後の佛教は彼の太子以前の佛教より出でたるものならんも、殆んど前者と相同じからず。又増訂版の第二章奈良の佛教的、文化は削除せられて、本書に於ては第十一章太子の事業の一章を立て、太子が當代狩獵の弊